歌声のあふれるまちをめざして

620人の歌声響く

第2回浜辺の歌音楽祭

第2回浜辺の歌音楽祭（加賀隆寛実行委員長）が11月10日、市文化会館で開催され、園児、小中学校の児童生徒やコーラスグループが「浜辺の歌」などの合唱曲を発表、ホールに澄んだ歌声を響かせました。

■**成田為三を顕彰**

主催は市教育委員会。「浜辺の歌」をはじめ、優れた童謡などを数多く作曲し、日本を代表する作曲家として知られる米内沢出身の成田為三（1893-1945）を顕彰するとともに、歌声のあふれる活気あるまちづくりにつなげることを目的として開催されている音楽祭です。

■**今年は22団体620人が参加**

今年の音楽祭には、園児から、小中学校、一般のコーラスグループなど昨年を上回る22団体が参加、約620人が出演しました。

第1部には「浜辺の歌キッズ」「コールもりよし」「合川東・北小学校」など12団体10グループ、午後からは、「綴子小学校」「森吉中学校」「あかしや合唱団」など10グループが出演。各グループは、「りすりす子栗鼠」「浜辺の歌」など為三が作曲した曲を含め、それぞれ2曲から3曲を発表しました。

1・2年生が出演した前田小学校は、2曲目でお父さんたちのギター伴奏に合わせて「また会える日まで」を歌い、会場をアット・ホームなムードで包み込みました。

また、指揮者はほとんどが先生や指導者でしたが、鷹巣南中学校は生徒の北嶋慶一君（3年）が務め、男女51人が心を一つにして「浜辺の歌」と「大地讃頌」の2曲を歌い上げました。

■**歌詞に思いを込めて**

1部・2部とも、大館市花岡町出身の作曲家・橋本祥路（しょうじ）氏による講評が行われました。第1部では、「どのグループの発表も歌に込められた思いがとてもよく表現されていた。また、ステージ発表は例えば伴奏はピアノで、と形式にこだわることもない。前田小学校は、お父さんたちのギター伴奏で歌ったが、両親と一緒に発表することも音楽の楽しみ方の一つ」と説き、また、「かつて『思い出』は『思ひ出』、『追いし』は『追ひし』などと、はっきりと発音しない『い』は『ひ』と表記していたが、これは歌詞のことば一つにも気持ちを込めているから。歌詞に込められた思いを意識しながら歌うとより表現力が高まる」などと、感想を述べていました。

2部の講評のあと、橋本氏の指揮で出演者全員が会場のお客さんと一緒になって「浜辺の歌」を合唱し、歌の輪を広げました。

浜辺の歌音楽館少年少女合唱団

浦田小学校

鷹巣南中学校

MMC（森吉ミュージッククラブ）

地方史の謎に迫る～小猿部の歴史

講演会・『九戸の乱』と横渕・千葉常左衛門を語る」

戦国時代の終りを告げる「九戸の乱」と関わりを持つ本市七日市・横渕の旧家・千葉家にまつわる歴史をテーマとした講演会が11月17日、市中央公民館で開かれ、歴史ファンらが、興味深い話に耳を傾けました。

▲「九戸の乱」と、この合戦を記した希少な写本「奥州南部九戸軍記」を著した横渕・千葉常左衛門について講演する阿部幹男氏

■**希少な写本が見つかる**

演題は、「『九戸の乱』と横渕・千葉常左衛門（ひょうざえもんかん）を語る」。講師には、岩手県立盲学校副校長で地方史研究家として知られている阿部幹男（みきお）氏を迎えました。

「九戸の乱」は、今から約400年前、豊臣秀吉の天下統一後、北東北を舞台に展開された戦国時代の終わりを告げる大合戦。この合戦を記した希少な写本「奥州南部九戸軍記」が盛岡市で平成7年に見つかりました。

■**著者は千葉家11代常左衛門**

阿部氏らが調べたところ、写本はもともと「比内横渕の千葉家」が所蔵していたもので、筆者は第11代の千葉常左衛門とわかり、その経緯についての研究が始まりました。

九戸の乱では、南部氏と対立した九戸政実（くのへまさざね）が、現在の二戸市に所在した九戸城に5千の兵とともに籠城したものの、天正19年（1591年）南部氏の要請で秀吉が差し向けた6万5千の中央軍により落城し、政実は処刑され、城内に残っていた兵士や子女も皆殺しにされたといいます。

「九戸合戦」と呼ばれるこの戦いは、これまで「南部根元記」や、「九戸軍談記」によって後世に伝えられてきました。

しかし、「奥州南部九戸軍記」の所在はそれまで知られておらず、千葉家についても、かつて南部地方に住んでおり、第4代常左衛門が変遷を経て元和2年（1616年）に横渕に移り住んだことは家系図にも記されていますが、九戸氏との関係はよくわかっていませんでした。

■**九戸氏と千葉家を結ぶもの**

阿部氏は、一通りこのような背景に触れた上で、▽「南部根元記」などはいずれも九戸氏をアンチヒーローとみなしているが、写本には英雄視した政実が登場する。このような捉え方をするのは、九戸氏側の人物、と仮説を立てながら『奥州南部九戸軍記』がどのような経緯で書き伝えられたかという謎に迫ります。

▽千葉氏の遠祖は上総（かずさ）（現在の千葉県）にいた平氏（平家）の一門。その後、所領が拡大し千葉姓は東北地方にも広がる▽しかし南部の千葉氏は九戸神社の千葉氏のみ。九戸氏のもとで別当職（神社に属しつつ仏教儀礼を行う僧侶）を務め、必勝祈願など行う側近だった▽戦いに敗れた後、千葉氏が落人となって南部を離れてから合戦の記録を代々伝え、その記録を筆まめな11代常左衛門がまとめたものではないか、と推測します。

■**殖産で村繁栄に努めた常左衛門**

横渕村は明治初期まで製紙や養蚕、製糸などの盛んな村として知られていました。これは千葉家が代々杉や桑、紙の原料となる楮（こうぞ）などの植栽を行い殖産に努めたからですが、さらに11代常左衛門は養蚕、製糸、絹織物生産などで村の繁栄に寄与したほか、読書と筆硯に親しみ、「落葉集」という随筆を著すなど文芸的素養にも優れていたとされています。

阿部氏は、「岩手は昔から馬の名産地。千葉家も南部では馬産を行っていた。横渕村は、かつて養蚕や織物の生産が盛んだったが、代々肝煎（きもいり）を務めた千葉氏は、馬産で培った経営手腕を横渕村でも生かしたのだろう。また常左衛門は働き手として多くの障害者を雇用したといわれるが、福祉政策でも功績が大きかった徳のある人物」などと常左衛門を称えるとともに、「『奥州南部九戸軍記』の下書きや『落葉集』がどこかにあるはず。ぜひ探してほしい」と会場に呼びかけていました。

聴講に訪れた参加者は、大合戦が行われた戦国時代の南部と本市・千葉家とのゆかりなど、時間と地域を超えた壮大な歴史ロマンに思いをはせていたようでした。